やたらと横に長い土地だ
どこもかしこも寺、寺、寺…
俺は坊さんじゃねえぞマッタク

ぶつくさとぼやきながら、北山は山間の道を駅の方へと歩いていた。

野郎、てめえだけ美味しい所を持ってくつもりだな
俺だってあの害鳥野郎とは因縁があるって一のに、なぁ～にが

　　『女の子の確保が最優先です』

だ
優等生ぶってもテメェが一番、アイツと遣り合いたがってんじゃねえか
そもそもあの会社は俺のモンだろうに、何時からあんな若造に指図されるようになっちまったんだ
クソッ！

共同経営者への呪いの言葉をで唱えながら、ついてくる猫やら鳩やらに蹴りのポーズを見舞ってみせた。
よほど人に慣れているのか、猫も鳩もその程度では逃げ出さない。
相変わらず北山の後ろをトコトコと付いてきた。

とうとう畜生共にもなめられたか
情けねぇなぁ

まるで北山の声が聞こえたかのように、唐突に携帯電話の着信音が鳴り響いた。

「オウ」
「北サン、今どこですか？」
「尾道にゃあ着いてるぜ。今しがた誘拐容疑者の実家にも顔を出してきた。お高くとまった女将に冷たくあしらわれて、猫やら鳩やらになぐさめられてるところさ。うらやましいだろ」
「衣笠恵美子が実家へ女の子を置くとは考えられません。どこか別の、誰にも知られてない場所でしょう。そこは彼女の地元だ。顔は知られ過ぎてる」

電話の相手は北山の嫌みなど聞いていないかのようだった。

「そんな初歩的なアドバイスをこの俺様にする為に、わざわざ乏しい経費を削って携帯に掛けてきたのかテメェは？
俺の忍耐にも限度ってモンが…」
「どうしたんですか北サン？　もしかして怒ってるんですか」
「おぉ、判るか！　俺は今すこぶる機嫌が悪い！！」

顔の真ん前にかざした携帯に吐き捨てるように北山が怒鳴った。

「…鴉が消えました。所在が掴めません」

電話の向こうから冷ややかな声が響いた。

「なんだと…」
「僕もそちらに合流します。奴は弟の後を追ったのかも知れない」
「…」
「今は女の子の捜索が第一です。すぐにこちらを出ます。連絡は到着後に。じゃ」

北山が言い返す暇も無く、それだけ言って電話は切られた。

◇

「どのくらい離れているんですか？　衣笠さんちの旅館って」
「あと３つ坂を越えて、地蔵さまの裏手を回り込んだ辺りだったかの。きついじゃろうが辛抱しちくれ」
「３つ…坂３つ、ですか」

大汗をかきながら車椅子を押す殉は心底しんどそうであった。

「ゴメンね、ジュン」
「なぁに、これくらい…どうってこと…ないや」
「フォッホッホ、椅子を押すのは兄さんの役目らしいからのぅ。すまんが年寄りは道案内だけさせてもらうけ。もう昔みたいな力はないけん」

老人は口で言うより闊達な歩調でスタスタと先を歩いてゆく。

「あっ、ここ左ね。ねえジュン、衣笠さんはどうして碧ちゃんを連れていったりしたのかな」
「ボクにも…わかんない…わかんないケド、碧ちゃんじゃなきゃいけない理由があるとしたら…」
「あるとしたら？」
「サイコイン…これしかない」

加夏子が一瞬、息を呑んだ。

「あのチビちゃんと会ったのも駅前だったか。酷く右膝が痛んだんじゃが漁休むわけにもいかんでな、びっこも引かずに餌運んどったんじゃ。したっけジッとこっちを見て『おじいさん、足、痛いの？』といいおった。わしゃあビックリしたぞ、ビックリしたが嬉しかった。婆さんが死んでもう何年も経ったからな、誰かに案じてもらえるなんぞ久しくなかったからのぅ。売店にいた女がこっちを見とったが、あれが衣笠さんとこの末娘だったか。おおきくなったもんじゃ」

背を向けて歩きながら、老人は誰に聞かせるでもなく話し続けていた。

つづれ折りの道を曲がろうとした時、坂の上から男が一人、歩いてきた。
グレーの背広を肩にかけ、額に汗を浮かべたその男は不機嫌そうな顔で三人を一瞥すると、俯いたまますれ違い坂を下っていった。何匹かの猫と鳩が男の後ろをついてゆく。
変な光景だった。

「なんか感じわるいね、今の人」
「ダメだよカナ、聞こえちゃうじゃないか」
「大丈夫だって。それにあの人、なんかこの辺りの人じゃないみたい」
「まさか。想像力逞しすぎだよ」
「そうかなぁ」

車椅子から身を乗り出し、加夏子は後ろを振り返ってみた。
角を抜けた男の姿はもう見えなくなっていた。

◇

トボトボと坂道を歩いていた北山が、ふと足を止めた。

車椅子の女…
杖を持った少年…
まさか

ガバッと振り返った。
驚いた猫が飛びずさり、鳩が数羽、空に舞い上がった。

◇

坂を上りきったところにある、小さいが品良く纏められた庭園を抜けた所が目当ての旅館であった。
玄関までの道には小砂利が敷いてあり、やっと苦行から解放された筈の殉はもうひと汗かかされる羽目になった。

「ねぇジュン、聞こえてる？　あと少しよ」
「…ハァハァ…も…もうダメ…」
「頑張って、あとチョットだから」

青息吐息で何とか旅館の入口まで車椅子を押した殉は、精魂尽き果ててへたりこんでしまう。

「大丈夫？」
「な、なんとか」

殉をいたわる加夏子の脇へ老人がやってきて、ここがそうじゃよと声を掛けた。

「兄さん大丈夫かいのぅ」
「ワタシいってきます。おじいさん、ジュンのこと見ててくれませんか」
「引き受けた、いっといで」

ホイールを回して玄関の引き戸まで行くと、手を伸ばして開けた戸口の中へ向かい加夏子は勢いよく叫んだ。

すみませーん！
ごめんくださぁーい！！

途端に足音が響き、仲居風の中年女が顔を見せた。

「鈴木さまですね。ようこそいらっしゃいました。御嬢様ですか、係の者が伺っている筈ですのにとんだ失礼を。今、人を呼びますので暫くお待ち下さい…チョット！　誰かおらんね！」
「あ、アノ、ワタシ鈴木じゃあないんですけど」
「えっ？　違うの？　じゃあ富沢さんとこの…」
「それもチガイマス、ワタシひとを捜しにきたんです、ここが実家だと聞いたので…」
「お客じゃないのかい！？　なら裏口から来てくれんと困るわ」

「何ですか。騒がしいですよ」

奥から和服姿の女性がゆっくりと歩み出てきた。
白いかすりの着物。
高く結い上げた髪と凛とした佇まいが、彼女こそここの女将だと見る者に教えていた。

ママに似てるな…

加夏子は少しの間、ポカンと彼女を見つめていた。

「お嬢さん、人を捜しているとおっしゃってましたわね。娘の…恵美子の事かしら」
「そうです。でもどうして」

「貴方で二人目ですのよ。今日、あの子を訪ねてきたのは」

微笑んで女将は言った。

「お連れさんもいらっしゃるようですし、兎に角おあがりなさいな。さぁ」

女将は仲居に、車椅子を中へ挙げるように言うと、裾を返して奥へと歩き出した。